

令和7年度 学校評価中間報告

加賀市立錦城中学校 校長 山下 悟

1. 学校教育目標	「お互いの個性を尊重し、心身ともに力強く成長することで、持続可能な社会の創り手として自ら課題解決に取り組み、創造的に未来を生きることができる生徒を育成する」
2. 目指す生徒像	①将来の夢や希望を持ち、自主的、自律的にその実現のために努力できる生徒（挑戦） ②自ら考え、学び、自他の良さに気づき、ともに未来を生きることができる生徒（創造） ③お互いに認め合い、助け合い、高め合うことができる生徒（協働） ④考えを自分の言葉で伝え、相手の意見にも共感・受容ができる生徒（相互理解） ⑤相互理解を通し、温かな人間関係を築くことができる生徒（温かい人間関係作り）
3. 目指す教師像	・学び手は常に正しいという視点を持った教師 ・誰もから信頼される教師 ・ドグマにとらわれず、学びを進める教師 ・夢を語り、夢を持たせる、夢先案内人たる教師
4. 加賀市学校教育ビジョンから学校教育目標を捉える	・お互いの個性を尊重し・・・誰一人取り残さない(Project02) ・心身共に力強く成長することで・・・HEART/MIND (Project X) 温かい人間関係作り ・持続可能な社会の創り手として・・・地域と一緒に (Project04) ・自ら課題解決に取り組み・・・学びを変える (Project01) ・創造的に未来を生きる・・・未来は自分で創る (Project03)
5. 今年度の重点目標	①将来の夢や希望を持ち、自主的、自律的にその実現のために努力できる生徒（挑戦） ②自ら考え、学び、自他の良さに気づき、ともに未来を生きることができる生徒（創造） ③お互いに認め合い、助け合い、高め合うことができる生徒（協働） ④考えを自分の言葉で伝え、相手の意見にも共感・受容ができる生徒（相互理解） ⑤相互理解を通し、温かな人間関係を築くことができる生徒（温かい人間関係作り）

みんなで創る、みんなの学校

評価項目	①教育課程 学習指導	
今年度の重点目標	ラーニング・アドベンチャー～メタ認知スキルの強化を通して～	
具体的取り組み	・さまざまな教育活動を通して、自ら学ぶことに積極的で、自分自身で学ぶ目標を設定したり、計画的に進めていけるよう生徒をサポートしていく。 ・個別最適な学び、協働的な学びを効果的に取り入れていく。 ・ICT機器等を効果的に活用し、互いの考えを共有し合い深める場を充実させる。 ・45分授業で効果的に学びを進めていけるよう、市教委伴走チームや外部とも連携して授業力向上につなげる。 ・全国学力・学習状況調査および石川県基礎学力調査の結果を分析し、委ねる学びを取り入れた授業の成果や課題を教科部会等で検討し、基礎学力の定着、活用力の向上のための手立てを行っていく。 ・組織的な授業改善のために、校内研修会の充実や授業力向上のための協力体制の整備に取り組む。	
主担当	主幹教諭・研究主任	
現状	・昨年度はメタ認知スキルを育成するための具体的な実践をいくつか試みた。（例：振り返りシートの活用、委ねる学びの促進）多くの生徒は意識的に振り返りを行い、学びを深めているが、そうでない生徒も一部いる。どのように全員のスキルを向上させるかが課題である。 ・学びの方の学び方を意識した授業も増え、生徒の学ぶ姿勢に変化が出てきている。 ・生徒の学びに一定の変化が見られたが、個人差が大きく、すべての生徒が自律的に学ぶようになったわけではない。また教師の関わり方（どこまで支援するか、どこで見守るか）のバランスが重要だと感じている。 ・教員の「委ねる授業」に対する理解にも個人差があり、研修等で共通理解を行う必要がある。	
評価の観点	(成果指標) ・課題に取り組んでいる間、自分のやり方が上手くいつているか、自分で分析している。 ・課題が解決できない時は、やり方を変えたり、他の方法を試してみようとしている。	(努力指標) ・生徒が意欲的に学べる工夫（授業、授業外問わず）をしている。 ・生徒が学習において目標を持ち、計画的に取り組めるようにサポートしている。
実現状況の達成度判断基準	「課題に取り組んでいる間、自分のやり方が上手くいつているか、自分で分析している。」 「課題が解決できない時は、やり方を変えたり、他の方法を試してみようとしている。」と答えた生徒の割合が、 A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	「生徒が意欲的に学べる工夫（授業、授業外問わず）をしている。」 「生徒が学習において目標を持ち、計画的に取り組めるようにサポートしている」と答えた教師の割合が A：90%以上 B：75%以上 C：60%以上 D：60%未満
判定基準備考	C、Dの場合は指導法の再検討を行う。	C、Dの場合は授業方法や形態などの再検討を行う。
判定結果(中間)	84% (A)	91% (A)
成果と課題今後の改善策等	昨年度から行っている委ねる授業やメタ認知スキルの向上に向けた取り組みにより、自分に合った学び方を考えて取り組むことができるようになってきたことが、結果に結びついていると考えられる。生徒が授業・単元ごとに自分の学んだことだけではなく学び方も振り返り、次の授業・単元に向けて学習サイクルを回していくことができるよう、各教科で振り返りシートを工夫していることも影響しているだろう。金沢工業大学の田中教授にもご指導ご助言をいただき、生徒の学びが深まるような振り返りやフィードバックを学ぶことができた。今後もチーム会での情報・実践を共有しながら、よりよい授業や振り返り、フィードバックについて教員が学び続けることで、生徒の学びにつなげていきたい。 また、さまざまな学習方法（形態や課題など）を生徒が選択できるよう、教職員の授業構想の視点も変化してきている。ねらいを説明して共有したり、選択・回答の意図を問い返したりしながら、指導支援を行うことが必要になる。生徒が自分の状況を判断し、適切なものを選択できる手立てを教科部会で定期的に検討していく。	

評価項目	②生徒指導
今年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・「生活行動目標（時を守り、場を清め、礼を正す）」、「PBS（ポジティブな行動支援）」による生徒が安心・安全に過ごせる居場所づくり（集団づくり）に努める。 ・自己指導能力の育成に向けた積極的な生徒指導を行っていく。
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会と連携し、生徒たちが自己決定する場面を増やし、自分たちで決めたルールを自分たちで守るという自治的な意識をさらに高揚させていく。 ・積極的な生徒指導を心掛け、自己指導能力の育成に努める。ルール遵守やトラブル、いじめにつながる軽率な言動を、生徒たち自身の声かけによってなくしていけるような働きかけを継続していく。 ・学校行事や清掃活動等において、縦割り活動を充実させることで3年生が中心となった自治的集団を育て、その中で生徒一人ひとりの集団意識の向上にも努める。 ・全校集会は生徒が自分たちの思いを語る場と位置づけ、生徒会を中心に進行し、たくさんの語り合いがなされるようにする。 ・学力向上のための学びのサポートチームと連携し、構成的エンカウンターを取り入れていく。 ・週に一度、机やロッカーを整理整頓する時間を設定し、落ち着いて学校生活を送ることができる環境づくりを行う。 ・月に一度の生活アンケートや、Q/Aアンケート等を積極的に活用しながら生徒一人ひとりに寄り添うような教育相談の充実を図る。
主担当	生徒指導主事
現状	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度の学校生活アンケートでは、「学校に行くのは(どちらかといえば)楽しい」、「まわりの人に(どちらかといえば)親切にしたり優しくしたりしている」の2項目では高い数値を出していることから生徒も学校生活に過ごしやすさや楽しさを実感していると思われる。今後も生徒たちの実感の表れとして最も肯定的な数値がさらに伸びるように、また、否定的な生徒がゼロになるように安心安全な学校であること+αの楽しい活動や自信を持たせる取り組みがさらに充実するような働きかけを全職員で考えていく。また、一部の生徒の言動で困ったり悩んだりする生徒も存在することから、生活アンケートやQ/Aアンケートを通して生徒の悩みや不安に気づき早急に対応することや、生徒一人一人の自己指導能力の育成に向けた積極的な働きかけが必要と感じている。いじめや問題行動等のトラブルについては、積極的に認知し、情報共有と素早い対応を今後も継続していく。 ・学校行事や全校集会などにおいては生徒が主体的に活動する場面が増え、生徒の成長が見られた。その一方で、返事を含めて自分の考えや思いを積極的に表現することが苦手な生徒もおり、リーダーだけに限らず誰もが自分の考えを表現することが苦手な生徒にとっても発言・発信しやすい雰囲気や場面づくりをさらに進めていく必要がある。
評価の観点	<p>(成果指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が安心・安全を実感でき、温かい学級・学校となっているか。 ・集団の中で、互いの違いを認め合い、思いやりのある言動がとれている。 ・生徒一人一人が自身の言動について考え、その場にあった適切な判断がとれている。
実現状況の達成度判断基準	「学校に行くのは楽しい」及び「まわりの人に親切にしたり優しくしたりしている」と答えた生徒が A：95%以上 B：85%以上 C：75%以上 D：75%未満
判定基準	C、Dの場合は取り組み方法の再検討を行う。
備考	生徒調査を1・2学期に行う。
判定結果(中間)	学校に行くのは楽しい…95% (A) 親切にしたり優しくしたりしている…94% (B)
成果と課題 今後の改善策等	「学校に行くのは楽しい」及び「まわりの人に親切にしたり優しくしたりしている」の2項目で高い数値が出ていた。昨年度に引き続き、日々の生徒対応でPBS（ポジティブな行動支援）を根拠とした生徒指導を推進することで、肯定的な回答につながっていると捉えている。また、教職員アンケートでも問題行動に対して適切な情報連携がとられ、組織的に対応できていたと感じている割合が多く、生徒が安全安心を感じることができる学校環境整備ができていたと考えている。2学期以降もPBSを根拠とした生徒指導を、全教職員の共通理解のもとで組織的に進めていきたい。

評価項目	③キャリア教育・進路指導
今年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・系統的にキャリア教育をすすめる、主体的に進路選択をする能力・態度を育成する。 ・学習したことを自身の将来に活かそうとする態度を育成する。
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・学活や道徳・総合的な学習の時間を通して自分を振り返り、将来の生き方を考えたり、社会的自立に向けて必要な力を身に付ける授業を意識して行う。その際、キャリアパスポートを活用する。 ・1年は金融教育や起業教育、身近な職業調べ、2年はトークフォークダンス（地域の大人との交流）や上級学校調べ、職業体験講話、3年はライフプランニング授業や高等学校体験入学、職業体験講話などの取り組みを行う。 ・学校生活の様々な場面で、主体的に自己決定する場面をつくっていく。 ・STEAM教育やプログラミング学習などを通して、論理的思考力や問題解決力を身に付け、自身の活動に生かす。 ・各教科でキャリア教育に関連する内容の洗い出し、キャリア教育の年間指導計画を充実させる。
主担当	進路指導主事
現状	<ul style="list-style-type: none"> ・外部から専門的な知識を持った講師や、地域の職業人を招いて金融教育やトークフォークダンス、ライフプランニング授業を行ったことで、生徒たちが将来の生きたを考える機会を増やすことができていると考えられる。 ・行事や委員会活動の企画運営が当事者以外には見えにくいようになっているため、開かれた活動をすることで、生徒が主体的に自己決定をしていることを全校生徒で共有していくと効果的であると考えられる。
評価の観点	<p>(成果指標)</p> <p>生徒は総合的な学習や道徳や学活の時間などを通して、自分の将来の生き方や進路について考えることができている。</p>
実現状況の達成度判断基準	「自分の将来の生き方について考えることができた」と答えた生徒が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満
判定基準	C、Dの場合は取り組み方法の再検討を行う。
備考	生徒調査を1・2学期に行う。
判定結果(中間)	87% (A)
成果と課題 今後の改善策等	校舎1Fの進路コーナーを充実させたことで、3年生はもちろん、1・2年生への高校進学に対する意識を高めることができたと考えられる。今後は、「働くこと」や「高校進学」のみならず、そのために、総合的な学習の時間を活用し、人生設計やキャリアプランニングなどの機会を与えられるような計画をたて、実施していきたい。

評価項目	④安全指導 1防災	
今年度の重点目標	・避難訓練や防災に関する学習活動を通じて、大きな災害から、生徒自らが身を守ることができる姿勢、行動、判断力を育成する。	
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・1学期に1回、2学期に1回の目安で避難訓練を実施する。(内1回は火災、1回は震災を予定)3学期抜き打ち避難訓練(必要に応じて) ・2年生を対象とした救急救命講習の実施。 ・不審者対策防犯訓練(職員向け)の実施。 ・防犯教室の実施。 	
主担当	防災担当者	
現状	・能登半島地震を経て、多くの生徒が震災に関して考える機会があったと感じる。特に、地震の怖さ身近さ、その後に起こりうる災害による自分達の生活について大きく考え方が変わったのではないと思う。いつ、どこで、どのような形で起こりうるか予想できない日々の中で、常に危機意識を持たせることが必要と言える。昨年は2回の避難訓練を行い、意識の向上を図った。生徒は緊張感を持ってしっかりと臨めるようになった。また抜き打ちで避難訓練をすることで、本番をより想定した訓練になると思う。	
評価の観点	(成果指標) 防災に対する意識が高まり、防災訓練等に緊張感を持って臨むことができる。	
実現状況の達成度判断基準	防災訓練および研修を通して防災に対する意識が高まったと答えた生徒および職員が A:80%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満	
判定基準	生徒、職員ともにC、Dの場合は取り組み方法の再検討を行う。	
備考	生徒調査を1・2学期に行う。	
判定結果(中間)	生徒…94%(A)	教職員…82%(A)
成果と課題今後の改善策等	火災を想定した避難訓練を行った。消防署の方にも来ていただき、火災時の注意点などについてもお話ししていただいたことで、防災に関する知識は高まったのではないかと感じる。ただ、実際に火災が起きたわけではないので緊張感などの訓練に向かう姿勢に関してはどうしても課題が残る。2学期には、火災を想定した避難訓練を生徒や職員に告知なしで実施するなど現実性のある想定をし、実際に起きたときに備えたいと思う。	

評価項目	④安全指導 2交通安全	
今年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自転車通学生のヘルメット着用を徹底していく。 ・登下校時に街頭指導を行い、交通マナーの徹底を図る。 	
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・登下校指導や集会での呼びかけ等を通じ、交通マナーの徹底を図る。 ・交通事故が起きた場合はその事例を生徒に知らせ、通学路の危険な場所を周知させる。また、通学路のなかで危険な場所がある場合は通学路の検討、改善を行っていく。 ・一時停止の標識がある交差点を教員間で共通理解、生徒との確認を集会を通して行う。 	
主担当	交通安全担当者	
現状	<ul style="list-style-type: none"> ・年度当初に、1年生の保護者に通学路の登録・自転車通学許可申請を行い、交通マナーの順守を約束させている。 ・あいさつ運動を兼ねた街頭指導や一斉下校での街頭指導を行い、交通マナーの定着を図った。 ・交通量の多い表通りに通学路を変更したことで、マナー向上、ヘルメットの着用の徹底が一層求められる。 ・98%の生徒がマナーやルールを守っていると答えているが、ノーヘルや並列走行が多々見られる。 	
評価の観点	(成果指標) 登下校指導を通して生徒の交通マナーに対する意識の向上が見られたか。	
実現状況の達成度判断基準	「交通マナー(ヘルメット着用、並列走行をしない、一時停止を守るなど)を意識するようになった」と答えた生徒が A:80%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満	
判定基準	C、Dの場合は取り組み方法の再検討を行う。	
備考	生徒調査を1・2学期に行う。	
判定結果(中間)	94%(A)	
成果と課題今後の改善策等	交通マナーを意識するようになったと答えている割合が94%となっているが、巡視の際にヘルメットを被っていないかたり、並列走行している姿が多々見られる。交通マナーの呼びかけや巡視を行っているが、重大な事故発生については自分事と捉えている生徒が少ないために、ヘルメットの未着用や並列走行につながっていると考えている。2学期も交通マナーの呼びかけや巡視を続けていくが、生徒たちが自分事として考えられるように具体的事例を用いて説明する等、生徒の想像力に働きかけるよう取り組んでいきたい。	

評価項目+A99:P108 ⑤保健管理 1健康・成長	
今年度の重点目標	心身の健康について関心を持ち、生涯を通じて主体的に健康的な生活を送ることができる生徒を育成する。
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が自分の生活習慣を振り返り改善できるよう、1・2学期に1回ずつセルフチェックを実施する。 ・セルフチェックの結果一覧表を作成し、改善の必要がある生徒への個別指導を行うとともに、学期末保護者面談の際に実態を知らせ、生活習慣改善の協力を仰ぐ。 ・全体的な傾向をつかみ、改善に即した学級での保健指導を実施する。
主担当	保健主事
現状	<ul style="list-style-type: none"> ・セルフチェックの結果を1学期と2学期で比較した結果、2学期は、午前0時以降に寝ている生徒や、7時間未満の睡眠時間の生徒が増加していた。朝食の摂取状況についても、1学期に比べ2学期は毎日食べた生徒の割合が減少していた。また、学年が進むにつれ午前0時以降に寝ている生徒が増加しており、それに伴い睡眠時間も短くなっていた。生活習慣の改善が必要な生徒への個別指導を引き続き行うとともに、学期末保護者面談の機会を利用し、保護者にも現状をお知らせし協力を仰いでいくよう努めていく必要がある。
評価の観点	(成果指標) 保健指導を通して、健康な生活習慣の確立に向けて、生徒及び職員の意識が高まったか。
実現状況の達成度判断基準	規則正しい生活を送るよう心がけたと答えた生徒および習慣改善へ向けての指導を実施したと答えた教職員が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満
判定基準	生徒、職員ともにC、Dの場合は取り組み方法の再検討を行う。
備考	生徒および教職員調査を1・2学期に行う。
判定結果(中間)	生徒…86% (A) 教職員…82% (A)
成果と課題今後の改善策等	規則正しい生活を送ることを心がけたと答えた生徒が86%いたが、指導したと答えた教職員が82%に留まっているのが気になる。健康な生活習慣の確立に向けて、100%の教職員が個別指導を含め指導を実施してほしい。1学期はセルフチェックの結果一覧表は作成せず、チェックシートを印刷し学期末保護者懇談の際に保護者に渡し、実態を知らせ生活習慣改善の協力を仰いだ。就寝時刻は学年が上がるにつれ遅くなっており、午前0時以降に就寝している生徒が1年生は16%、2年生は22%、3年生は23%、全体で20%いた。また8時間以上の睡眠がとれている生徒は学年が上がるにつれ減少しており、1年生は55%、2年生は51%、3年生は39%だった。朝食については、全校で89%の生徒が毎日摂取していた。規則正しい生活習慣について継続して保健指導を実施していく必要がある。

評価項目 ⑤保健管理 2食・健康	
今年度の重点目標	・計画的に食に関する指導を行うとともに、給食時間における指導の充実を図る。
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・食に関する指導については、栄養教諭が中心となり、生徒の実態を把握した上で、各学年に応じた指導を継続していく。 ・給食委員会の活動を通して、生徒同士で食の大切さや感謝の気持ちを伝えあう機会を増やす。 ・給食時間の指導について、(準備や配膳、片づけを含む)年度初めに教職員で共通理解を行い、学期ごとに反省を踏まえ再確認を行う。
主担当	栄養教諭
現状	<ul style="list-style-type: none"> ・85%の生徒が苦手なものでも少しは食べるようにしていると答えており、多くの生徒が栄養バランスを考えて給食を食べていると思われるが、給食時間の様子を見ると、苦手なものは口にしない生徒も、少数ではあるが存在するので、継続的な指導が必要である。 ・教職員の生徒への積極的な働きかけがされているが、学級によって準備時間や残食量などに差が見られるので、今後も教職員間の共通理解が必要である。 ・行事食やコラボ給食などの取組により、生徒の食への興味関心を増やすことができた。
評価の観点	(成果指標) 生徒は栄養バランスを考え、給食を食べるように努力できたか。
実現状況の達成度判断基準	栄養バランスを考え、給食を食べるように努力できたと答えた生徒、及び働きかけができたと答えた教職員が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満
判定基準	生徒、職員ともにC、Dの場合は取り組み方法の再検討を行う。
備考	生徒および教職員調査を1・2学期に行う。
判定結果(中間)	生徒…82% (A) 教職員…82% (A)
成果と課題今後の改善策等	栄養バランスの整った給食の提供や給食時間の巡回を行った。ただ、残食や個人内の好き嫌いといった課題が残る。2学期には、給食時間の指導や個別指導を通して給食を積極的に食べたいようになるような指導や個別アプローチに取り組んでいきたいと思う。

評価項目	⑥特別支援教育・教育相談
今年度の重点目標	・支援を要する生徒の情報を学校全体で共有し、職員の誰もが適切な支援をできるよう工夫する。
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・気づき票やQU（楽しい学校生活を送るためのアンケート）などの分析により、支援を要する生徒を早期に発見する。 ・支援シート・ファイルを充実させる。 ・情報交換を密にすると共に、対象生徒に対しての共通理解を図る。 ・校内支援会議、ケース会議を開催し、担任を中心とした教職員全体での具体的な支援方法を共有・実行する。 ・SC（スクールカウンセラー）、SSR担当、通級指導教室担当、教育支援員との連携を深めて、生徒理解に努めていく。
主担当	特別支援教育コーディネーター・教育相談担当
現状	<ul style="list-style-type: none"> ・不登校、別室登校の生徒数は昨年度から大きな変化はないが、2学期ごろから欠席数の積み重ねで微増する傾向にある。別室登校については、教職員全体で対応するシステムが機能している。SSRの設置により、生徒の個々の状態に合わせた対応をしているが、他の生徒や教員との関係性によって対応が難しい部分もある。 ・支援を要する生徒に関しては、課題や支援の方法について、全教職員の共通理解が図られており、二次障がい未然防止にもつながっている。 ・通常学級における支援を要する生徒は増加傾向にあるとともに、支援の多様化が課題になっている。
評価の観点	（努力指標） 学校生活に不応をおこしている生徒、またはおこす心配のある生徒に対して、適切な支援を行うことができたか。
実現状況の達成度 判断基準	特別な支援を必要とする生徒に対し、生徒の実態に応じた支援を行ったという教職員が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満
判定基準	C、Dの場合は取り組み方法の再検討を行う。
備考	教職員調査を1・2学期に行う。
判定結果（中間）	95%（A）
成果と課題 今後の改善策等	生徒指導部会での学校生活に不応をおこしている生徒について、情報共有を実施し児童生徒理解支援シートの作成を行っている。1年生の学年は、QUの活用により、教員の見取りとは違った視点での要支援生徒の状況の把握・共有をし、対策や安心して過ごせる教室や空間づくりの方策を検討していく。SSRの活用により、ほぼ不登校出会った状態から学校へ通うことができるようになってきている生徒や、苦手意識のある教科を取り出して活用するなど、個々の生徒に合った支援を行うことができている。しかし、学習の補助としての面は、生徒それぞれで学力や意欲に差があり、SSR支援員のみならず、コーディネーターや教科担当とも連携していく必要があると考えられる。また、教育支援員との情報共有・連携を高め、支援を要する生徒への効果的な対応の仕方について考えていく。

評価項目	⑦組織運営・業務改善
今年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・学校運営企画委員会を定期的に開催し、各業務について分析し、チーム会の有効な活用などで業務の効率化を図るとともに、「報告・連絡・相談」を徹底し、課題に対して組織的に対応する。 ・業務改善の取り組みを進めるため、各教職員の業務を見直し、改善を図っていく。 ・教職員の負担軽減と生徒の心身の発達のために、部活動休養日を計画的に設定していく。
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・学校運営企画委員会及びチーム会などを定期的に開催し、その内容を確実に各学年会等で伝達し、情報の共通理解・共通行動に努める。 ・最終退校時刻を19時30分と目標設定する。 ・45分授業を効果的に展開していくために、まず授業を見つめ直し、再構築をはかることと、自分自身の校務内容を改善し積極的な業務改善に努める。 ・C4thを有効に利用して、業務の負担を軽減する。 ・自動採点システムの効果的な活用を全教科で推進していく。 ・部活動休養日を踏まえて、活動を計画し実行していく。 ・定時退校日を月2回設定し、業務遂行の効率化を図る。 ・業務の平準化を進める為、校務分掌の内容や担当者を見直し、学校行事等も精選していく。 ・留守番電話やコードモン等を有効活用していく。
主担当	教頭
現状	<ul style="list-style-type: none"> ・学校運営企画委員会や生徒指導部会において学校全体の取り組みや各学年の様子について情報共有し、協力して課題に取り組むことがある程度できているが、それぞれの会での内容を学年会で伝達し、共通理解・共通行動を確実に図る時間が取れていない。 ・業務改善面では、時間外勤務時間は減少しているが、退校時間はまだまだ遅い。 ・部活動休養日は定期的に設定することができているが、その日が職員会議や校内研修等になることが多い。 ・C4thやコードモンを使って、業務を削減することができている。
評価の観点	（努力指標） それぞれの職員が働き方改革を意識して、業務改善の取り組みを行っているか。
実現状況の達成度 判断基準	働き方改革を意識して、業務改善の取り組みを行っている職員が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満
判定基準	C、Dのときは原因を分析し、改善を図る。
備考	教職員調査を1・2学期に行う。
判定結果（中間）	⑪組織的学校運営と連携：100%（A）⑫自身の業務改善意識：73%（B）※番号は教職員アンケートの番号
成果と課題 今後の改善策等	<ul style="list-style-type: none"> ・チーム会を定期的に設けて協議した内容を、企画運営委員会を通して学年会や職員会議で共有できた。また、ささいな事柄も主任層から管理職へ、あるいはその逆へと共通意識をもって望むことができた。 ・チーム会の運び方をより効率的にすること（開催回数を増やすことや資料の事前配布など）、個々人が「やるべき業務／やらなくてもよい業務」を分類するなど、日々の業務を洗い出す意識が求められる。

評価項目	⑧研修
今年度の重点目標	教師が相互に学び合うという意識をもち、日常的、定期的に研修をおこなう。
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・学力向上のためのチーム会に全職員が所属し、定期的に会を行って、各チームで活動計画を立てて実践し、その成果や課題を共有し、組織的に取り組めるようにしていく。 ・職員会議、学校運営企画委員会、学年会、教科部会、チーム会で、教育活動全般にわたる取り組みの中で若手・中堅・ベテランが相互に学ぶ体制づくりの場を確保する。 ・日程調整を行い、外部からも講師を招くなどして効果的な研修になるようにしていく。
主担当	教頭、主幹教諭
現状	<ul style="list-style-type: none"> ・学力向上のためのチーム会を定期的に行い、計画の進捗状況や今後について協議している。 ・定期的に学校運営企画委員会が行われており、教育活動が組織的に行われるようになった。 ・校内研修等は行われているが、計画的ではない面があるので、今後は若手教員への研修も含めて計画的に実施していく。
評価の観点	(努力指標) 計画的、日常的に校内研修をおこなうことができたか。
実現状況の達成度 判断基準	計画的、日常的な校内研修が効果的に行われているという職員が A：85%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満
判定基準	C、Dのときは原因を分析し、改善を図る。
備考	教職員調査を1・2学期に行う。
判定結果(中間)	100% (A)
成果と課題 今後の改善策等	外部講師を招聘したり、SCを講師としたりと各種ニーズにあった校内研修を提案者を中心に計画的に行うことができた。また、参加した教職員も主体的であった。

評価項目	⑨保護者・地域との連携
今年度の重点目標	教育活動の状況について適宜お知らせしていくとともに、その内容を見直し、保護者や地域との連携と学校への理解がより深まるようにする。
具体的取り組み	ホームページの更新や各種便りの発行を着実にを行うとともに、内容の検討を行っていく。 また情報の把握をしっかりと行い、その対応について保護者メールでも適切に配信していく。 コドモンを有効活用して、保護者への連絡を適宜行っていく。
主担当	教頭
現状	<ul style="list-style-type: none"> ・学校便り等の各種便りやコドモン、HPで学校の様子を随時知らせている。 ・コドモンで緊急メールを配信したり、保護者からの欠席連絡にも利用している。 ・コドモンで配布物を添付して保護者へ確実にお知らせを届ける。(ペーパーレス化の推進) ・HPは更新をこまめに行っており、アクセス数も順調に伸びている。
評価の観点	(成果指標) コドモンやホームページ等で、学校の様子が明確かつ丁寧に伝わっているか。
実現状況の達成度 判断基準	コドモンやホームページ等で、学校の様子がよく分かると回答した保護者が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満
判定基準	C、Dのときは具体的な取組を考える。
備考	保護者調査を1・2学期に行う。
判定結果(中間)	89% (全体A) (1年：80% 2年：91% 3年：98%)
成果と課題 今後の改善策等	ホームページの更新や各種便りの発行を着実に行うことができた。地域や保護者からの情報に各分掌担当者が真摯に対応し、コドモンにて発信することができた。

評価項目	⑩教育環境設備
今年度の重点目標	学校安全点検を定期的を実施し、安全な施設になるように整備、美化に努める。
具体的取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・安全点検の計画に沿った実施と、不良箇所等への早期の対応を心がける。 ・日常においても職員が協働しながら校舎内外の見回りを行い、不良箇所の情報の把握と早期の対応及び美化に心がける。 ・生徒からの情報が生かされるよう、生徒会委員会とも連携していく。 ・縦割り清掃活動を今後とも続け、しっかりと清掃に取り組む環境、雰囲気大切にす。
主担当	教頭、管理担当者
現状	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員アンケートから、殆どの職員が安全点検は計画通り実施し修繕、美化に努めることができている。 ・日常においても見回りの中で不良箇所等の情報の把握を行っている・協働で営繕を行う体制作りは十分といえない。 ・職員室の棚や窓際といった部分の美化、整理は十分といえない。 ・不良箇所の整備、修繕は十分とはいえないが、教育委員会等とも連携しながらできるだけ早期に取り組んでいる。
評価の観点	(努力指標) 校舎内外の管理箇所の安全点検を定期的に行い、協働で修繕・美化に努めることができたか。
実現状況の達成度 判断基準	校舎内外の管理箇所の安全点検を定期的に行い、協働で修繕・美化に努めることが A：できた B：おおむねできた C：あまりできなかった D：できなかった
判定基準	A、Bの合計が80%未満のときは、問題点を把握し、改善に向けて管理責任者等と対応を検討していく。
備考	教職員調査を1・2学期に行う。
判定結果(中間)	91% (A)
成果と課題 今後の改善策等	学校安全点検を7月に実施した。今後は営繕担当で協力して修繕に務めたい。一方で、校内清掃の機会は今後増やすことを心がけ、校内の美化意識向上を目指す必要がある。